

<講演会『弥生・古墳集落とモノ作り』記録1>

ムラ立地から古代国家形成を考える～趣旨説明として～

若林邦彦

ただ今、ご紹介いただきました同志社大学歴史資料館の若林と申します。よろしくお願ひいたします。最初に皆様に謝っておかなければならないことがあります。私は雨男でございまして、このような状況（註・当日は台風の影響で土砂降り）を招いたのは、私の不徳の致すところかなと思っています。

それはさておき、今、館長の方からもお話がありましたように、この展示とその母体となった研究活動そのものがどういう趣旨で行っているのかという点、それとその中で今日お話しいただく真鍋さんと古川さんの研究されていることはどういう意義を持っていると主催者側としては考えているかという点についてお話をさせていただきます。それとあわせて、この共同研究のトータルの部分での成果や私自身の分析も含めましたお話をさせていただきます。題して「ムラ立地から古代国家形成を考える」ということで、これで趣旨説明に代えさせて頂きたいというふうに思っています。

どういうふうな研究事業したかということとその目的意識の話をお話させていただきたいと思ひます。その研究事業の成果をこういう形（スライド1参照）で本にして昨年度末に刊行しました。タイトル通り『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』ととても長くなっていますが、研究費申請のために説明的にしようと思うとこんなふうになってしまいます。

その中では、今日お話しいただくお2人以外にもたくさんの方に関わっていただいております。連携研究者として京都大学の伊藤淳史さん、研究協力者として京都府教育委員会の藤井整さん、それと今日お話しいただく古川匠さん、それから橿原考古学研究所の宇野隆志さん、寝屋川市教育委員会の濱田延充さん、それから今日お話しいただく交野市教育委員会の真鍋成史さん、同じく交野市教育委員会の吉田智史さんという方にお集まりいただきまして、いろいろなことを調べていったわけです。

伊藤さんには主に京都盆地の弥生の集落の動態、濱田さんには淀川流域の弥生集落動態、それから藤井整さんには弥生墓制について論じていただきました。古墳時代に古墳というものをモニュメントとして見ることは皆、御存じだと思います。弥生時代の墓は現在の地物としては見えないわけですが、そういうものと集落の関係を考えてみようということです。それから、今日お話しいただく古川さんの古墳時代の集落動態、これは古墳との関係も含めての議論となります。ですが、それで、古墳のことを中心にしながらというので宇野さんに研究してもらって、それから吉田さんに交野台地の古墳時代の集落の実態を論じていただきました。それから、真鍋成史さんに今日話していただく金属生産のことについて論じていただきました。あと私自身が集落遺跡集成データ取りまとめた議論をさせていただきます、どういうふう集落の位置が変化していったかという全体の話をもとめました。こういう形で3～4年間ぐらい研究事業をやりました。

どういう問題意識に基づいたかという、古墳の動態にもとづく研究については、どこに大きな古墳があってなどという議論はよく知られています。で研究者の間でもそういう分析が古墳時代研究の主流だったんですけども、そうでない部分、集落とか人々の暮らしとの関係に着目しました。

その場合には古墳のある時代だけでなく、その前の弥生時代からの話をしないと説明ができないだろうと考えました。それと、最近、こういう問題意識は私たちだけ考えたのではなくて、実は古代学研究会という研究グループも同じようなテーマで共同研究を行っています。私も古川さんもその中にかかっていたのですけれども、同じ問題意識の双子みたいな感じで活動をしていました。いずれも集落立地と墳墓の関係を重視しています。それに加えて、金属器生産の基礎的研究については、古代学研究会のシンポジウムではあんまり触れられていなかったのが、我々の研究の方の個性というのはそこにあります。現在、そういう内容で企画展や講演会をしているのは、その部分を強調したかったからでもあります。

そういう古墳時代の墳墓の研究の中で、古代国家ができるのは強い王権ができたからだというような言い方がよくされます。しかし、それではどうして強い王権ができるのかという仕組みの問題にならないと思います。そういうことを考えたかったということです。主な成果を結論的に言うと、長い間の集落立地の変化と墳墓形成の動態がはっきりして、それが社会変化の鍵の一つと考えます。それから、それと手工業生産、特に金属の生産の画期が連動しているということ。そういう変化の時期に、古墳時代の中期に大規模な古墳がどこかに集中する時代があるということです。

これに関しては、そもそもの問題の中で我々の前には偉大な研究者の方々たちがたくさんいて、いろんな議論をもともと古墳の方からしているわけです。例えば、白石太一郎さんはここに示すように(スライド7参照)当時の列島の中の一番中心となった権力者の墓がどういう地域に作られるかということについて描いた模式図を作られました。一目瞭然ですが、古墳時代前期には奈良盆地でそういうものが形成されているのに、古墳時代中期になると皆、百舌鳥古市古墳群という超大規模古墳がですね、大阪平野の中南部に作られるというようになっていきます。古墳時代の中でも、ここに大きな違いがあるみたいだという話は、最大規模の古墳の分布を研究する中で言われているわけです。

また、そのことは最大規模の古墳の話をするだけではなくて、今我々がいるこの京都盆地から淀川水系の中でも重要な変化があると指摘されています。都出比呂志さんがこういう図をお描きになっています(スライド8参照)。これは白い丸が、古墳時代に、いわゆる古墳群が作られることを示しています。黒い三角形が古墳時代前期のその地域の中の一番大きな古墳を示しています。黒丸が古墳時代の中期にそれが作られる場所を示しています。例えば、木津川流域だと古墳時代前期には、この南の端の方、椿井大塚山という三角縁神獣鏡をたくさん出した古墳があって、ここに大規模墳墓が作られるのに、中期になると大規模古墳は城陽市の方に、久津川車塚古墳の方に移動してしまう。北河内の地域でも大規模古墳は、古い段階に交野森古墳群とがありますが、中期になると牧野車塚古墳というところで淀川沿いに移る。それから、乙訓地域では古墳時代前期にこの向日丘陵のところに、前期古墳の大規模な古墳があるんですけども、桂川の下流に近いところに古墳時代中期の大規模な墳墓が出来てきます。百舌鳥古墳群・古市古墳群のようなこの時代の一番大きな墳墓の変化と同じように、

それぞれの地域でも中心となり、盟主となる地域あるいは、集団というのは変わっていつてしまいます。各地域と中心地域の両者が連動しているといわれます。これはだから、大王と言われる人たちの系譜の問題だけではないと、全国的にというか奈良盆地や大阪や南部の地域以外でも起こってる現象として考えなければならないと言う議論があります。これによってただの権力ゲームじゃない話として、古墳時代の前期と中期の変化っていうのは語られるようになってきたわけです。

もちろんこのことは別の人も論じていて、兵庫県立考古博物館館長をされています立命館大学名誉教授の和田清吾さんも実は同じフィールドを使ってもっと細かく分析されています。(スライド9参照)、これはいわゆる山城と言われる地域を中心としています、同じように、前期に大規模な墳墓が造られ、そしてそれが移動し、また別のところへ移動しということをもっと小刻みに繰り返していると言う話をされるわけです。

こういうふうな古墳時代の間で中心となる集団が動いていくという議論のモデルパターンが今我々のいるこの地域で語られてきたということになります。そういう有力集団の移動というものを古墳に見る変化というのが一体、そこにいる人たちの生活者の実態として何を反映しているのか、そして変わっていくのか、という問題にアプローチするにはこの地域を扱うことが、一番意味があることなのではないか考えました。同志社大学が京都盆地にあるからではなくて、この議論そのものが、この場所を中心として展開してきているということが一番大きなポイントというふうな思っています。ですから、今度の展示もその地域のものを取り扱って行っているということです。

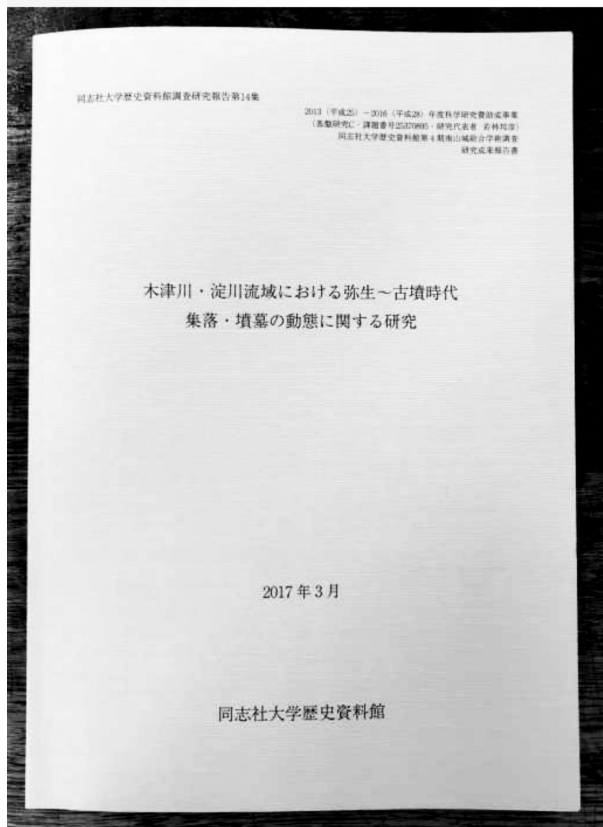
古墳時代の話をするのにどうして奈良盆地のモノを扱わないのかと、どうして河内平野のモノがないのか、ということは思う人いるかもしれません。しかし、そういう意図に基づいているということです。また、現在、よく、非常によくこの時代つまり古墳時代中期、それを多くの考古学者は5世紀代というふうな考えていますけれども、その時代の大きな変化として説明してるのはこの菱田哲郎さん(スライド10参照)です。こういう時期の変化については、ここに今日真鍋さんに話していただく、森遺跡なども含めて、王権の地域を中心とした動態の一部として起こっているというような認識もされています。つまり、王権がパワーゲームの末にその権力を強めるといった説明体系が多くなされているのです。

この時代というのは奈良盆地と大阪平野南部を中心にしなから、大規模墳墓が造られてそれぞれの須恵器の生産であるとか鉄器の生産であるとか、そういう手工業生産の集中がはっきり見えるような遺跡群というのは見えてきて、そのときに大規模な墳墓が造られる。あと有名なのはここに葎屋北遺跡とこの図に書いてますが四条畷市に馬の生産をしていたと考える牧と考えられるような遺跡も見つかったりとかして、そういう、この地域を中心としたトータルな動きとして説明しようということになっているわけです。

でも、実際に今日の多分、古川さんの話や真鍋さんの話でも、この木津川・淀川流域地域の中で変わっていく社会の実態があるとされています。そういうものと関連した形で説明をしたいなということが私の趣旨ということになります。なんでこんなこと言ってるかっていうと、先にあげたようなパワーゲーム的な説明が大変多くなってきているというので、とても気になっているからであります。

ムラ立地から古代国家形成 を考える ～趣旨説明として

若林邦彦
(同志社大学歴史資料館)



目次

本研究の目的と経緯 (若林邦彦)	1
京都盆地の弥生集落動態 (伊藤淳史)	7
淀川流域の弥生時代遺跡群の動態 (濱田延光)	17
弥生集落からみた淀川・木津川水系の集団関係 (藤井 整)	27
山城地域の古墳時代集落の動態 (吉川 匠)	53
京都盆地における古墳と集落の動態 (宇野隆志)	73
交野の古墳時代集落動態 (吉田知史)	91
金属器生産からみた木津川・淀川流域の弥生～古墳時代集落 (真鍋成史)	115
集落と墳墓の立地からみた弥生～古墳時代の社会変化 (若林邦彦)	137
交野市郡津丸山古墳の測量成果 (若林邦彦)	163
木津川・淀川流域の弥生～古墳時代集落遺跡調査データ (若林邦彦・手島美香)	173

スライド1(上)・2(下)

・研究代表者

若林邦彦〔同志社大学歴史資料館〕

・連携研究者

伊藤淳史〔京都大学文化財総合研究センター〕

・研究協力者

藤井整〔京都府教育委員会文化財保護課〕

古川匠〔京都府教育委員会文化財保護課〕

宇野隆志〔橿原考古学研究所（2013～2014年度は京都市文化財保護課所属）〕

濱田延充〔寝屋川市教育委員会文化スポーツ課〕

真鍋成史〔交野市教育委員会社会教育課〕

吉田知史〔交野市教育委員会社会教育課〕

- ・なお、2012～2016年度には、手島美香〔同志社大学歴史資料館契約職員〕による研究事務の補助をうけた。

*木津川・淀川流域での古墳時代モデル

*古墳の動態と集落や生業の関係ってどうなっているのか

*弥生時代からの長期間の変化で考えたい

*呼応する研究集会も同時進行

*集落立地・墳墓の造営・生業や技術の相関を知りたい

*王権（パワーゲーム）で古代国家はできるのか？という問い

*問題意識

- * 長期での集落立地の変化と墳墓形成の動態がはっきりしてきた
 - * 古墳時代中期に低地集落が減り段丘や扇状地に村が集まる
- * 集落立地と生業だけでなく、手工業生産の画期も連動していることがはっきりしてきた。
 - * 集まった場所で專業的・階層的な手工業生産が行われる
- * なぜ、大規模古墳を作る時代やどこかにそれが集中する時代があるのか
 - * そういったムラの集中する領域の近接地に大規模墳墓が
- * しかし、淀川流域と京都盆地では同じ状況ではない（課題）

* 主な成果と課題

- * 首長系譜の推移に関して
 - * 白石太一郎1984「日本古墳文化論」『講座日本歴史1 原始古代1』東京大学出版会
 - * 畿内連合の盟主墓の移動
 - * 6世紀への変化の重視・群集墳論
 - * 都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』・1991「日本の古代国家形成論序説」『日本史研究』343
 - * 首長系譜の移動・変化
 - * 前方後円墳体制＝初期国家段階・・・階層的な古墳秩序・身分制的
 - * 和田晴吾1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館
 - * 都出論の深化
 - * 6世紀の変化にも注目
- * 京都盆地～淀川水系は、基本モデルの舞台！
 - * ここで、集落や生業と墳墓の関係を考えたい

* 過去の有名な研究

スライド5(上)・6(下)

その中で一貫として私自身が取り組みましたのは、この地域の集落の遺跡の分布がどういうふうに変化するのか、という問題です。

これは最終的に理解したものを模式図です。(スライド11参照) 色がいっぱい重なってとても見にくいかもしれませんが、この次のグラフ(スライド12参照)の変化と一緒にあわせて考えていただければいいんですけども、弥生時代から古墳時代、水稻農耕が始まってから、ずっとこの淀川流域の遺跡の分布を調べると、基本的に弥生時代の前期とか中期とかっていう紀元前の時期は、本当に淀川と後もその支流が作る低湿地に多くの遺跡が分布するということです。それはこのグラフを見てみると、三角州低地と書いてる、これがいわゆる低湿地の大きな河川の氾濫原になるような地域なんですけど、そこに立地する遺跡が60%から70%ということなんです。ほとんどの遺跡がそういうところへ立地しますがこれは当然のことでもあります。水稻農耕を始めれば、田んぼのできる地域というのは低地にあると。大規模な灌漑をするわけじゃなくて、部分的に高からず低からずの水田を使えるところを田んぼにするということであれば、そして、その開発をするというよりはその水の制御する人は、その田んぼのすぐ傍らに住むということであれば、これはむしろ当然のことだと思います。

ところがですね、弥生時代の後期とか古墳時代の初めぐらいになると、低湿地の遺跡遺跡検出数は半分を切ってきます。古墳時代になるとさらに減ってきます。古墳時代中期には、一番極端な状態という変な言い方ですけど、低地の遺跡検出数をもっとも少ないことがわかります。つまり、極端に古墳時代の中ごろぐらい、先ほど言いました大規模古墳の形成にもものすごく大きな変化がある時期、あるいは中心となる古墳群のそれぞれの地域で変化がある時期に極端に低地に住む人が少ないことがわかります。台地やものすごく高いところではないんですけど、扇状地といって山裾からおりてくる斜面部などにたくさん住むということで、その直後には少し古墳時代の終わりの頃や古代に入ると、少し元に戻っていくようであります。でも全体から見ると、弥生時代の始まりから古墳時代・古代にかけて全体の傾向としては、低地に住む人数が少なくなってしまって、古墳時代中期が最も極端な時代ということであります。

当然のことながらこれはすごく不思議なこと、これから想像できることは、それぞれの人たちが田んぼの横に住んでいない、ということを示しています。低地で田んぼをすることができなくなったということはないというわけですね。そうすると、田んぼの横にそれを開発したり耕している人が住んでいないという状態を示している。土地から引き剥がされてるような状態ですね。こういう変化が一番極端に進むのが実は古墳時代の中頃なのです。古墳が大きく変化するときには、地域社会ではこういうことが起こってるんじゃないか。先ほどの図でいうと、淀川流域低湿地から、古墳時代中期、中・後期を扇状地・段丘のゾーンへ移る。面白いんですけど、弥生時代の後期から古墳時代の始まりぐらいの時期というのは、どこにもまんべんなく人が住んでいるという状態なんですけど、最後にはこんなふうに極端に丘や山すそに寄ってってしまう。

それと同時に、皆さん御存じだと思いますが、古墳というものは多くは丘陵の裾や、段丘の地域に大規模のものが作られます。人々はこういうところへ寄っていくことと、古墳の形成あるいは古墳の中でも特定の地域だけが大きいものを作ること、この二つの動きはどうも関係しているみたいです。

そのことをモデル図にしてみました。(スライド13参照) 弥生時代の耕作地だけでなく方形周溝墓のような墳墓の分布は居住地のすぐ傍らにある。それぞれは、小規模な個別的にいろんな営みを行っているんですね。弥生時代はこんな状態が基本で一部に、いくつかのムラが合同で耕すような水田も多分あるだろう。ところが、古墳時代になると古墳が丘陵にも作られ、ムラはその近国も受けられ、低地には田んぼだけということになります。でも、ここに人がほとんどいないということは、この集団は離れところから耕作しに来ていると考えなくてはいけないということです。自分の耕地から引き剥がされた人たち、あるいはもしかしたら誰が、どの人たちがどこを耕すかという問題は、誰かあるいは何者かの管理に、強い管理の下にあるような状態というのを想像してもいいんじゃないかというふうに思っています。真鍋さんもこの後でこの図に加筆してご自分の鍛冶集団の認識を説明してくれます。こういう集落立地の変化と、手工業生産の変化がどういうふうに変化するかということがすごく大事だというふうに考えています。

それともう一つですが、今の私のこのデータ分析の中心として淀川沿いの話をさせていただきました。それと古墳時代中期に一つの大きな変化のピークがありますよってという話をさせていただいたんですが、実は地域ごとに見ると、もっと細かな変化があるでしょう。また、それぞれの集落の中身を考えた、分析した場合に違いが出てくることがあるかと思えます。それを京都盆地西部を中心に、古川さんにお話をいただくというのが今日の主旨ということになります。

ちなみにですが、こういうことから、結論的に言うと、真鍋さんもお話いただくことになると思いますが、手工業の専門化、非常に高い技術を持った特別なムラが出てくるようになるということ、そういう高まりというのは、古墳時代の中期を初めのピークとして見られるます。それと古墳の形成も、特定の非常に階層の高い人、集団の埋葬がはっきりしてくるというのも古墳時代中期に一つのピークがあります。それと、先ほど言った「経営の個別性」つまりそれぞれの耕しているところの傍らに住むという個別的なあり方、人々の営みというのは実はこの時期に非常に変化してしまう。我々が古墳時代って言ってるのはこの開きが非常に急速に広がっていく時代といえます。

もちろん、これらは若林の個人の認識ですし、ちょっと理屈っぽい話ということになるかと思えます。でも、本当に一番大事なことはこういう物事を理解するための受け皿というか、箱を用意しつつ、今日お話をいただくような実際にどういう技術がそこにあるのかという真鍋さんの話。それから、それぞれのムラのあり方というのはどういうふうに変質的に変わるのか。という古川さんの話。この2つを聞いていただきまして、この共同研究なり、展示の趣旨というものについて、お考えいただければありがたいなというふうに思っております。予定通りの時間に終わりましたね。そういう趣旨でこの企画展がこれからあるということをご理解いただければありがたいかと思えます。主役はお二人ですので、お2人にバトンタッチをしたいと思えます。どうも、ありがとうございました。

* 和田晴吾1998より

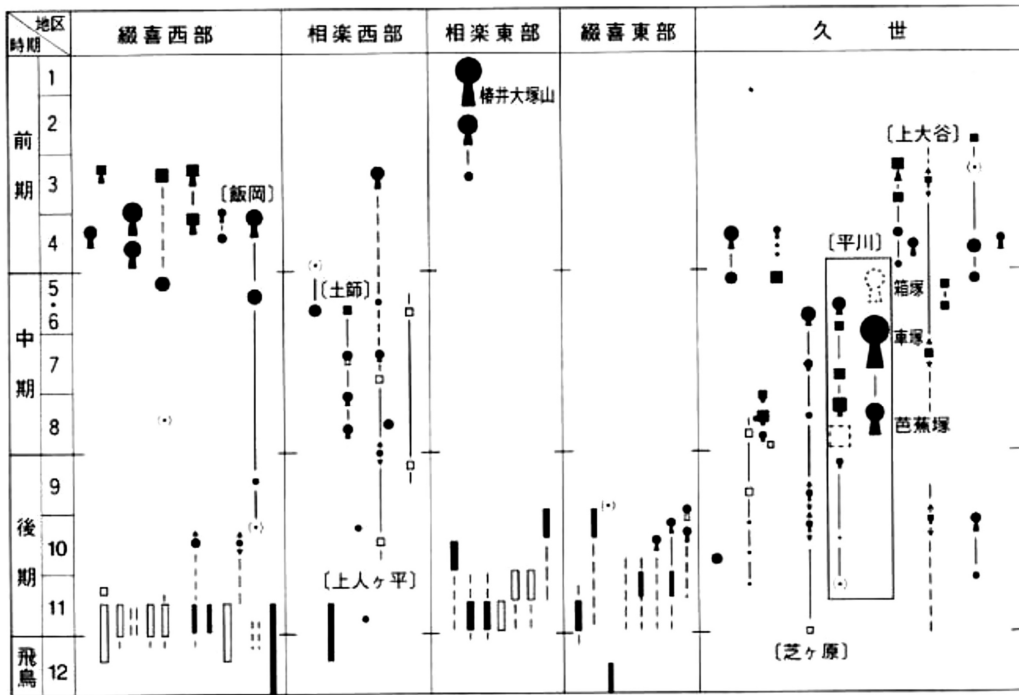


図1 南山城地域の古墳の編年 (太い棒線は群集墳で、黒線は横穴式石室墳、白抜き線は横穴。小さな白抜きの正方形は方形周溝墓。() 内の古墳は墳形・規模不明。[] 内は古墳群名)

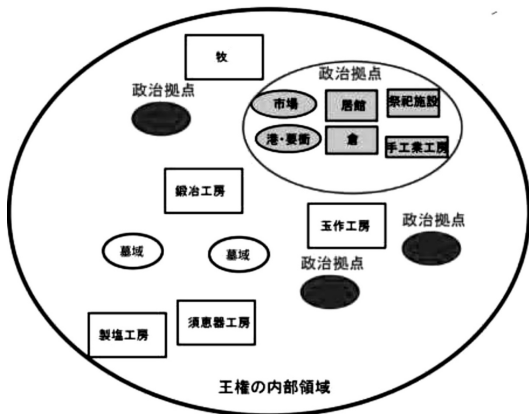
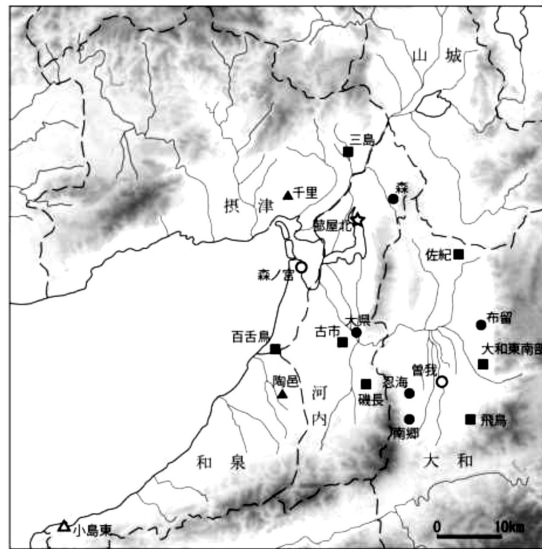


図8 5世紀の王権の拠点 (模式図)

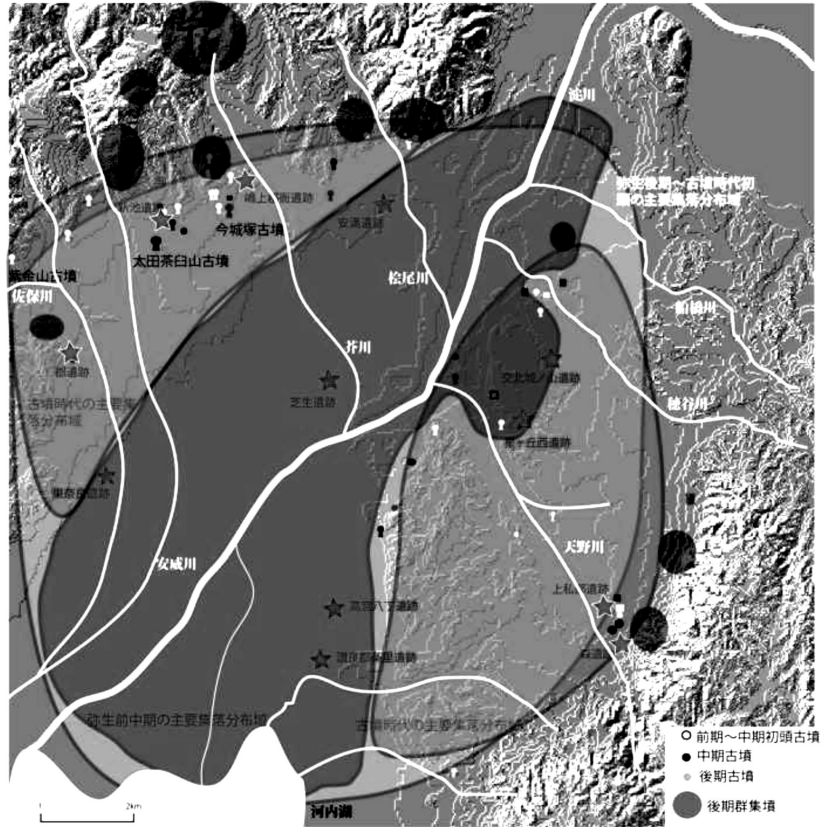


凡例 図1 5・6世紀の手工業拠点と王墓
● 鍛冶 ○ 玉作り ▲ 窯業 △ 製塩 ☆ 馬(牧)
■ 王墓

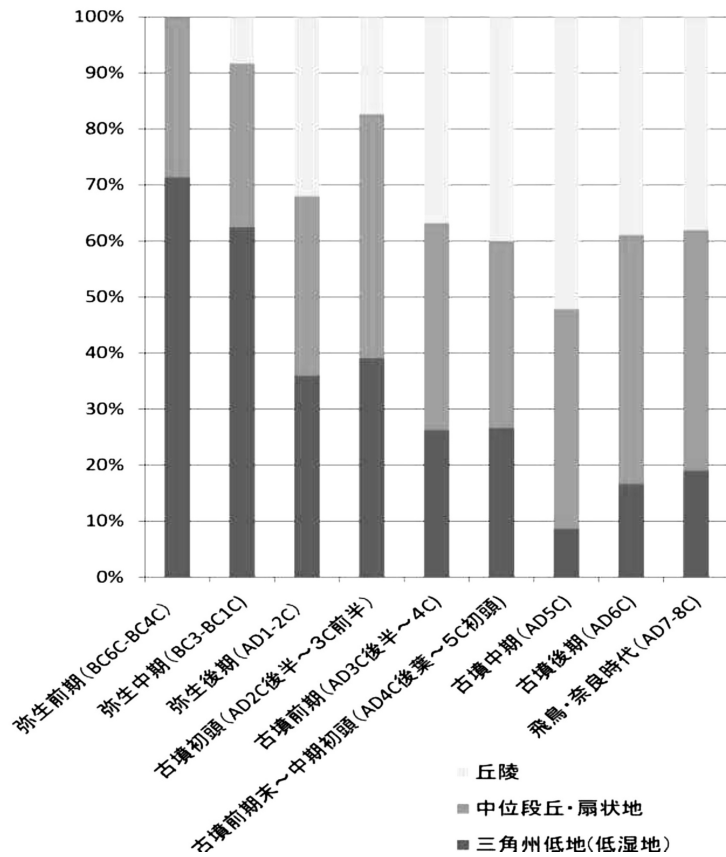
* 菱田哲郎2004「古墳時代中・後期の手工業生産と王権」『文化の多様性と比較考古学』、考古学研究会 より

スライド9(上)・10(下)

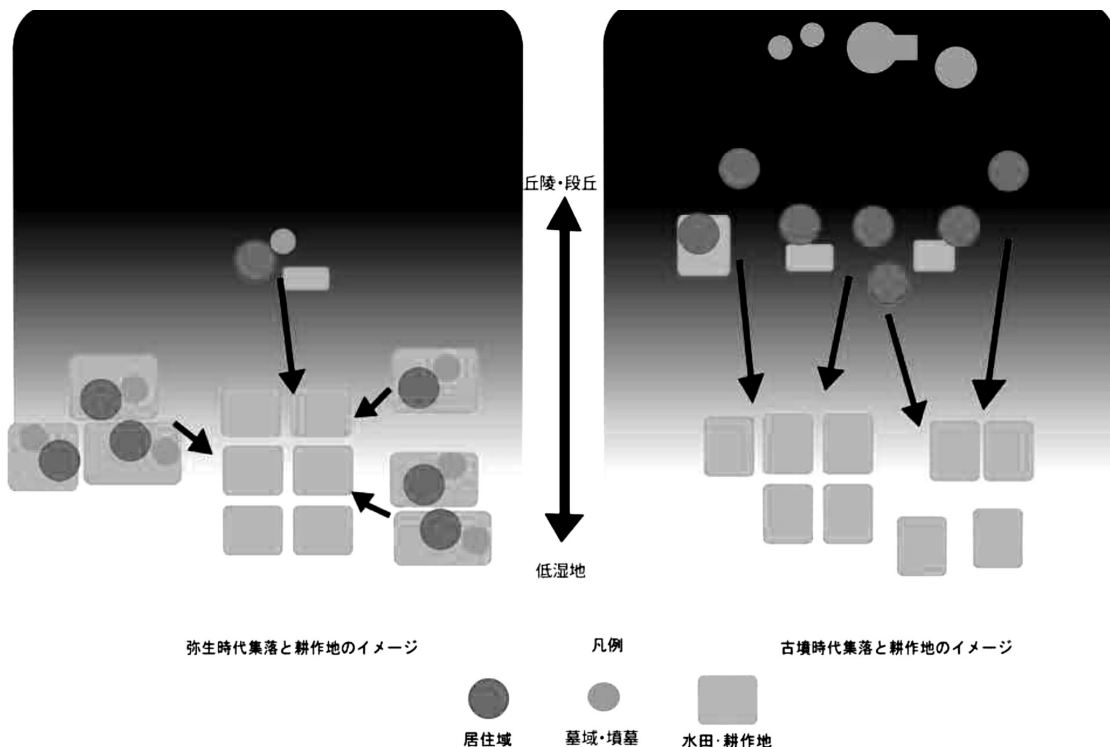
* 淀川流域の弥生～古墳時代集落・古墳の分布
(若林の研究成果)



* 淀川右岸域（桧尾川・芥川・安威川・佐保川流域）における集落立地の変化



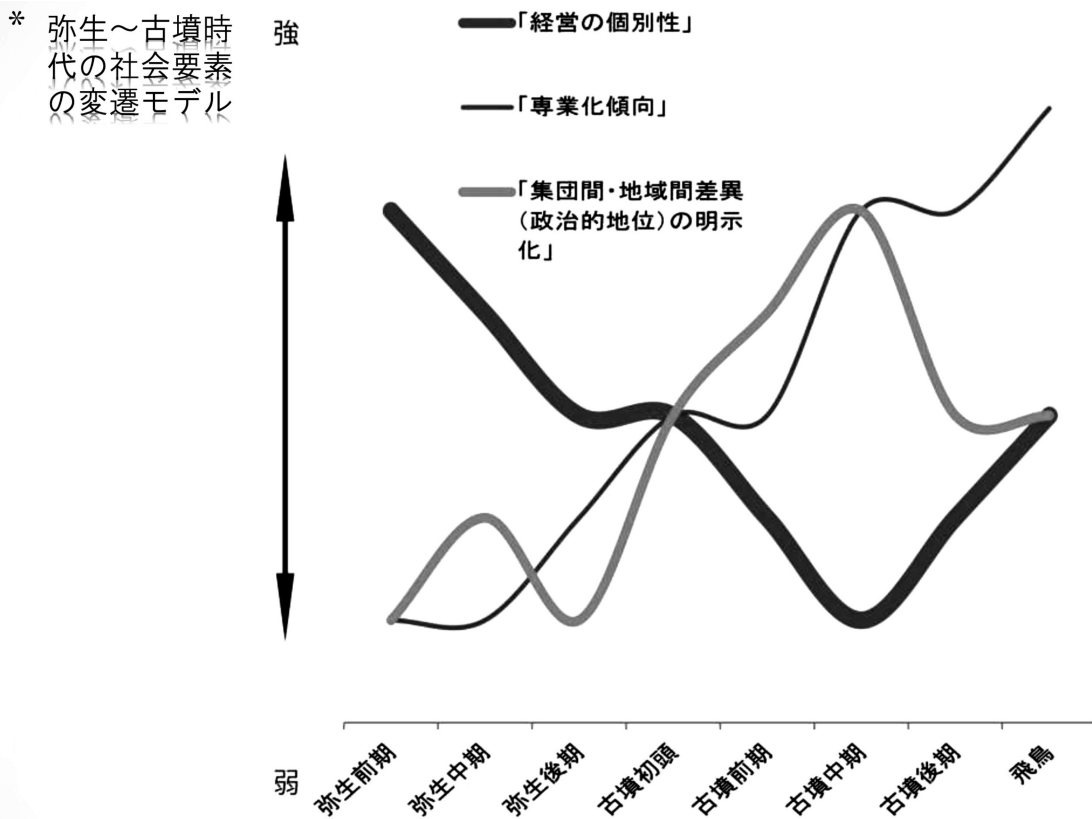
スライド11(上)・12(下)



* 弥生時代と古墳時代のムラと水田と墳墓のイメージ

- * 弥生時代の前・中期には、水田のつくられる低地に集落が立地する。しかし、古墳時代になると、古墳が造営される丘陵裾の地域に集落が集まりはじめ、古墳時代中期には、低湿地の集落は少数となる。
- * これは、鉄器生産をはじめとする手工業生産に大きな変化が現れる時期とも一致する。古墳時代には、地域首長が、配下の人々を山裾にあつめて、特別な手工業生産や古墳造営を行っていたのだろう。人々は、個々の耕作地から切り離され、耕地から離れた場所でムラを設けたのである。こういった状況では、だれがどの耕地で農業を営むかも、細かく管理されただろう。ムラ独自の経営はせばめられ、首長のもとに統合されていった。
- * 本展示でみた、モノ作りの変化も、こういった社会の変化とともにあったのではないか。

スライド13(上)・14(下)



* 弥生時代・古墳時代・古代の金属器生産の変化

* 真鍋成史さんのご講演

* 古墳と集落の関係変化

* 古川匠さんのご講演

* 古墳・集落・手工業
の連動の具体例
今日の主役

スライド15(上)・16(下)